

初めて日本を訪れるときは、前もってしっかり準備するのがよいでしょう。

たいていの旅行者はガイドブックを買って、いろいろ調べます。

けれども、いくらガイドブックを読んでも、実際に日本に来なければ、日本という国を体感することはできません。

とは言え、読んである程度のことを知っていれば、実際にそれが起こったときに想定内となります。

私の姉は昨年9月に初めて日本に来ました。最初の数日は、いくつかのことが印象的だったようです。電車、木、トイレ、そして太鼓が強く印象に残ったと言います。

外国人にとって、日本のトイレは悩みの種です。和式トイレか最新式トイレのどちらかで、最新式トイレの場合は気を付けていないと、水を流そうとしてシャワーの水が飛び出すことがあるからです。

今日の私たちの学びは、使徒の働きという書のガイドブックのような役割を果たしてくれます。

今日、このガイドブックをひととおり学んでおくことで、使徒の働きという素晴らしい書からどのようなことを学べるか前もって知ることができます。

優れた聖書教師たちは、聖書が忠実に教えられるところでは、神の御声が明確に聞かれると言います。

ですから、この大切な書を解説するにあたり、私は忠実かつ完全にしよう努めなくてはなりません。

神の御声が明確に教えられ、聞かれたとしても、それが忠実に適用されるとは限りません。

使徒の働きを学ぶとき、私たちは神が教えてくださる事柄を忠実に適用する必要があります。この書の教えは、キリスト教会の土台となっているからです。

使徒の働きの教えを適用するなら、私たちは神と御子イエス・キリストを重んじる教会になっていくはずです。

イエスは、「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。」とおっしゃいました。(マタイ 16:18)

今後数か月かけて使徒の働き全体から学びますが、その中から私たちに役立つ事柄を見つけましょう。

今日の序論を最大限に用いるため、表題を5つ用意しました。

1. なぜ使徒の働きを学ぶべきなのか。

使徒の働きを学ぶのが重要であるおもな理由が4つあります。

a) 神のご計画の成就を明確に理解する必要がある。

ルカの福音書の最後と使徒の働きの最初はつながっています。

ルカの福音書は1巻、使徒の働きは2巻と言えます。

ルカ 24:46-47

24:46 こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、

24:47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。

46節はルカの福音書のあらすじで、47節は使徒の働きのあらすじです。

神のご計画は、世界のすべての国民の救いです。

イエスは、神のご計画を実行されるお方です。

イエスは、ご自身の生誕と死と復活によってこれを実行されます。さらに、エルサレムから始まって他の国々に福音を携えるために教会に力を与える目的で、聖霊を送られたことによって、これを実行されます。

使徒 1 : 7-8

1:7 イエスは言われた。「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。

1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

ルカが使徒の働きを記していなかったら、私たちは神のご計画が成就したことを知らなかったでしょう。

b) 神がご自身の聖霊をとおして世界で働いておられることを認識する必要がある。

使徒の働きに記された聖霊の働きを認識することが非常に大切です。

聖霊は、2章では信徒に洗礼を授けることに積極的に働いておられ、4 : 31 では再び満たすことに働いておられます。

聖霊は、使徒 10 : 44-45 で異邦人にも臨まれ、13 : 2 では宣教師を聖別しました。

神は、聖霊をとおしてご自身のご計画を次々と実現しておられます。

神は、多くの反対があってもそうしておられます。

使徒の働きの随所には、あらゆる抵抗があったことが記されています。

外部からの宗教的な抵抗- 使徒 4:1, 5: 17, 6:8.

経済的な理由での抵抗- 使徒 16: 16, 19: 23.

内面的な偽善- 使徒 5: 1.

教会内の摩擦- 使徒 6: 1-7, 15: 36-41.

迫害- 使徒 5: 17, 8:1, 12: 1, 13: 49-52, 14: 19-20, 17: 1.

殉教- 使徒 7: 54 – 8: 4, 12:1-4.

嵐と難船- 使徒 27: 13.

裁判- 使徒 4: 5, 18: 12-17.

投獄- 使徒 12: 5, 16: 16.

これは、現代の私たちにとって大きな励みになります。使徒の働きに見られる事柄の多くは私たち現代人が経験することです。けれども、神はここに挙げられたような抵抗や反対にかかわらず、ご計画を実現してくださるのです。

(英国クリスチャン新聞「エバンジェリカルズナウ」2019年3月号掲載の話)

ナイジェリアでイスラム教から改宗したクリスチャン女性と子供たち 72 人がボコハラムに拉致された後、奇跡的に救出されました。

このグループの指導者だった男性 4 人は、拷問を受け、銃を向けられた状態で、キリストを信じる信仰を捨ててイスラム教に立ち戻るように迫られました。

それを拒んだ男性らは、家族や友人の目の前で銃殺されました。

その翌週、殉教した 4 人の男性の妻たちも、信仰を捨てるように命じられ、拒否すれば子どもたちが処刑されると言われました。

夜になると、子どもたちが母親に言いました。主イエスが子どもたちに現れて、守ってくださるから怖がらなくてよいと言ってくださったというのです。

次の日の朝、子どもたちはテロリストによって壁に向かって並ばされました。そして 4 人の母親たちは、イエス・キリストを捨ててイスラム教に戻るなら子どもたちの命は助かると脅されました。

母親たちは拒否しました。

テロリストの兵士たちは彼女たちに銃を向け、打つ体勢を取りました。
すると突然、兵士たちが頭を抱えて、「蛇だ、蛇だ」と叫び始めました。何人かは走って逃げましたが、その場で倒れて死んだ者もいました。
ひとりの母親は銃を手に取り、残っていた兵士たちを打とうとしました。
けれども、子どもに止められました。「お母さん、そんなことしないでいいよ。白い服を着た人たちが味方になって戦ってくれているのが見えないの？」

c) 使徒の働きの焦点がイエスであることに気づく必要がある。

使徒の働きの登場する説教はすべてイエスが焦点です。
五旬節にペテロはイエスについて説きました。（使徒 2 : 14-39）
足が不自由な人を癒やしたとき、ペテロはイエスのことを語りました。（使徒 3 : 6）
ペテロは、神を恐れる人たちにイエスのことを教えました。（使徒 10 : 34-48）
ペテロは、保守的なユダヤ人にも、教養のあるギリシャ人にもイエスについて語りました。（使徒 14 : 3、17 : 31）
パウロは、バプテスマのヨハネの弟子たちにイエスのことを教えました。（使徒 19 : 4）

d) 使徒パウロが教会史の中で重要な役割を担っていることを理解するため。

使徒の働きの書がなければ、教会や個人に多くの手紙を書き、教会開拓に深くかかわったパウロという人物についてよくわからないでしょう。
イエス・キリストご自身によってパウロが改宗し、働きを託されたことをしっかり理解するためには、使徒の働きを学ぶ必要があります。

2. 使徒の働きを私たち自身と私たちの教会である OIC にどのように適用すべきか。

まずお伝えしなければならない重要なことは、ルカがこれを記した目的に沿ったかたちで、この書の教えを適用する必要があることです。
私たちの務めは、ルカが何を重視していたかに注目することです。
ルカが使徒の働きを記した目的の中で、少なくとも 3 つ重要な事柄があります。

第一に、神の宣教の心の性質を伝えることです。
神が失われたたましいを求めておられることを、私たちがしっかり理解することをルカは望んでいます。
神のしもべたちが宣教の働きをするうえで、神が導き助けておられることに私たちが気づくよう、書かれています。これは、学びを進める中で気づくでしょう。
ですから、今日の適用としては、私たちは失われたこの世に手を差し伸べる神の宣教の働きに関わる必要がある、ということです。

第二に、聖霊の重要性を伝えることです。
ルカは、この書の中で成就したすべてのことは、人々の人生を変えるという聖霊の直接的なかわりのおかげだと教えてくれます。聖霊は、たましいの救いと信徒の成長にかかわり、奉仕に向けて力を与えてくださいます。
奉仕の内容が実務的な仕事でも伝道でも、同様に力をいただきます。

使徒 11 : 18

11:18 人々はこれを聞いて沈黙し、「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言って、神をほめたたえた。

使徒 13 : 48

13:48 異邦人たちは、それを聞いて喜び、主のみことばを賛美した。そして、永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰に入った。

使徒 16 : 14

16:14 テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。

使徒 18 : 10

18:10 わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから」と言われた。

使徒の働きには、神が直接語られたことばが 22 箇所ありますが、そのうち 16 箇所は、失われたたましいに手を差し伸べ続ける必要があると教会に思い起こさせるための言葉です。これは興味深い点です。

(神が直接語られた、というのは、イエス、主、聖霊、または御使いが語った部分を指します。)

第三に、失われたこの世に対する私たちの宣教の務めについて現実的になるためです。

使徒の働きは、教会の歴史上、実際に起こった史実です。ルカは、うれしい体験ばかりを寄せ集めて非現実的な世界宣教の絵を描いたのではありません。

疑いと落胆は通常、宣教活動について非現実的な期待を抱くことから生じます。

使徒の働きで私たちが学ぶのは、失われたこの世に福音を宣べ伝えるのが困難な仕事であり、先ほど触れた抵抗や反対につながり得るということです。

この抵抗や反対は教会内からと教会の外側の両方から来ます。

サタンは機会を与えればどんな人の中にも、またその人を通して働きます。

サタンが私たちを通して聖霊の働きを妨げようとするのを許さないよう、私たちは注意すべきです。

使徒の働きは、福音を伝える上であらゆる問題があっても、宣教を続けていくよう励ましてくれる書です。

ある注解者は、教会が失われた世に福音を届けるという宣教の務めを果たす度合いが、神から見て真の教会であるかどうかを試すと述べました。

福音に焦点を定め、そこから逸れないでいることは、すべての教会にとっての課題です。

3. 使徒の働きを学ぶ上で注意すべき事柄。

使徒の働きは、ルカが記した目的が明らかになるように書かれています。

私たちはいくつかのことに注意する必要があります。

第一に、繰り返しに注意してください。

繰り返しは、初期の教会の歴史を語るにあたって重要な出来事や大きな転機を強調するために用いられます。

一例は次のとおりです。

使徒 2,8,10 章で繰り返される聖霊降臨。

聖霊の降臨は非常に大切なので、3 度これについて記されています。

2 章では、聖霊がユダヤ人信徒に注がれます。

8 章では、サマリヤの教会に聖霊が臨まれます。

10 章では、異邦人コルネリオとその家族、そして親しい友人に聖霊が下ります。

ルカは聖霊の降臨を 3 回記録して、サマリヤ人と異邦人教会がエルサレムの教会に何ら劣らないことを示しています。

繰り返しのもうひとつの例はサウルの回心の話です。

サウルの回心は 9 章に全容が記されています。その後、22 章でエルサレムの群衆に対してその全体が繰り返されています。

さらに、サウロの回心は 26 章でフェストとアグリッパ王に対して語るかたちで繰り返されています。

ルカは、22 章と 26 章で読者に、前出の 9 章の説明を参照するよう促すこともできましたが、話を繰り返すことを選びました。

ルカの繰り返しは、パウロの回心の重要性と、エルサレムからローマへと福音が広まった経緯において果たした彼の役割を強調しています。

繰り返しの例は他にもたくさんあり、今日すべて取り上げる時間はありませんが、次に話を進める前に、もう1つの繰り返しの例について触れさせてください。それは「主のみことばが広まった」という表現の繰り返しです。

6、12、13、19章に、この表現の繰り返しが見られます。

今後、使徒の働きを学ぶを進める中で、私はこれらすべての繰り返し表現を指摘し、理解と適用の両面で、その重要性を取り上げていきます。

4. 使徒の働きの書を理解する。

これから始まるシリーズ説教からできるだけ多くを得るためには、福音が到達した紀元1世紀の社会について、ある程度の知識が必要です。

多くの点で現代社会は当時と似ています。

約2000年前のローマ帝国は非常に多文化で、多くの宗教やカルトが存在しました。

ギリシャ神話の神、アルテミス（19：27-28、35）、ゼウスやヘルメス（14：12-13）は非常に一般的でした。

多くの占い師、そしてユダヤ人の悪霊払い祈祷師さえいました。（16：16、13：8、19：14）

言葉も文化もさまざまでした。これは使徒2章で明確に指摘されています。

当時、個人は宗教に関して何を信じるか選ぶ権利と機会を持っていました。

ユダヤ教の中では、パリサイ人は死者の復活を信じていましたが、サドカイ人はそうではありませんでした。

これに加えて、ギリシャ哲学を教える学校はその内容がさまざまでした。

ストア派は、知識、勇気、知恵そして節度を追求しました。

エピクロス派は、現実から離れたところに幸福を求めました。彼らは、快樂が最大の善であると主張し、そして快樂を妨げるいかなる神々も信じませんでした。（使徒17：18）

これらすべての信念を統制していたのが、寛容と平和を主張するローマ帝国でした。

ローマ人にとって、宗教は個人的な信念ではなく、迷信と儀式にすぎませんでした。つまり、日常生活に大きな影響を与えるものではなかったのです。

ローマ人は、いけにえを神々にとりあえずささげ、それさえすればあとは自分たちの好きなように生きていました。（神道を信じる多くの日本人と非常によく似ています）

ユダヤ人の宗教は生き方を左右するものなので、ローマ人にはユダヤ人が滑稽に見えました。

ローマ帝国の支配者であるカエサルを絶対的な権威であり主だと認めるなら、どんな宗教でも容認されるというのが、ローマ帝国とその文化の問題でした。

真のクリスチャンにとって、これは問題でした。主イエスは、ご自身が唯一の神であるとおっしゃったからです。

このような文化に使徒たちが立ち向かった姿勢は、現代の教会に模範を示しています。

当時の教会は攻撃的にならず、配慮をもってコミュニケーションをとろうと最大限努力しました。

ユダヤ人の会堂、市場、地方などあらゆる場所で福音が語られましたが、その方法にこれらの努力を見ることができます。

（使徒4：19-20、13：16-41、14：15-18、17：30-31。）

イエスに焦点を絞った福音は、このような状況でも恐れることなく告げ知らされ、悔い改めとイエス・キリストへの信仰へと人々を招きました。（使徒20：21）

使徒の働きを理解するためには、著者について、また著者がどのような書を書いたのかについて考える必要があります。

医者だったルカが著者だったという直接の表記はありませんが、ルカがこの書の著者だったと2世紀以降の大半の聖書神学者が確信するのに十分な根拠があります。

文章、文体、著者の関心事を比較すると、ルカの福音書と使徒の働きは完全に一致しています。

どちらの書も、聖霊の働き、祈り、のけ者にされた人々への関心、そして福音が全世界に向けられたものだという事実

ルカ 1 章は使徒 1 章と非常によく似ており、著者は自ら記した「前の書」に言及しています。そして、どちらも「テオピロ」という人物に宛てて書かれています。使徒の働きがどのようなジャンルの書であるかを理解することも重要です。使徒の働きは、いわゆる「歴史物語」です。ルカは実際に起こったことについて秩序正しい記述を残しました。使徒の働き 1 : 8 でルカはこの書の骨組みとも言える内容を明らかにしています

使徒 1 : 8

1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

物語はエルサレムとユダヤを中心に 1 - 7 章、そして 8 - 12 章でサマリヤに移り、最後に 13 - 28 章は異邦人の世界に焦点を絞り、アジアとヨーロッパから始まってローマに至ります。聖書の歴史的物語を読んで学ぶときには、物語が常に展開していくことを理解することが重要です。さまざまな出来事が起こるそれぞれの場面は、時間も場所も異なります。

5. この書の文脈とルカがこの書を記した理由は何か。

序論の最後の要点は、文脈と著者の目的です。

ルカ 1 : 1-4

1:1 2 私たちの間ですでに確信されている出来事については、初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人々が、私たちに伝えたそのとおりを、多くの人が記事にまとめて書き上げようと、すでに試みておりますので、

1:3 私も、すべてのことを初めから綿密に調べておりますから、あなたのために、順序を立てて書いて差し上げるのがよいと思います。尊敬するテオピロ殿。

1:4 それによって、すでに教えを受けられた事がらが正確な事実であることを、よくわかっていただきたいと存じます。

使徒 1 : 1-2

1:1 テオピロよ。私は前の書で、イエスが行い始め、教え始められたすべてのことについて書き、

1:2 お選びになった使徒たちに聖霊によって命じてから、天に上げられた日のことにまで及びました。

使徒の冒頭によると、イエスが昇天後にも続けられた働きと教えについて、福音書の続きを提供することがルカの目的でした。

ルカ 24 : 46-49

24:46 こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、

24:47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。

24:48 あなたがたは、これらのことの証人です。

24:49 さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

使徒 1 : 3-8

1:3 イエスは苦しみを受けた後、四十日の間、彼らに現れて、神の国のことを語り、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。

1:4 彼らといっしょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。

1:5 ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」

1:6 そこで、彼らは、いっしょに集まったとき、イエスにこう尋ねた。「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか。」

1:7 イエスは言われた。「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。

1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

ここで、ルカの福音書から使徒の働きへと引き継がれる箇所を理解する必要があります。ルカは「テオピロ」に、神の目的が確かに成就することを確信してほしいと願っていました。ルカが考えていた成就のポイントは3つあります。第一に、キリストが苦しみに遭って死に、死からよみがえられたことです。（46節参照）

第二に、悔い改めと罪の赦しがすべての国々に宣べ伝えられることです。（47節参照）

第三に、聖霊をとおして、証をする力が与えられることです。（48-49節参照）

この3つのポイントは、使徒1:3-8にも登場します。

ルカの福音書の最後と使徒の働きの最初がつながっていることは、否定できません。

ですから、ルカがこの書を記した目的は、イエスの死と復活について告知知らされる働きをとおして、イエスが働きを続けられたと説明することです。

神は、キリストの名によって悔い改めと罪の赦しを宣べ伝えることをご自身の民に要求されます。神は、福音を告知知らせる神の民をとおして、ご自身の働きを統率しておられます。

使徒の働きを学べば、福音をすべての国々に携えていくという神のご計画が成就したことは見逃しようがありません。

神のご計画は今も、神に従う教会や人々をとおして、成就されつつあります。

私たち OIC も神のご計画に参加したいなら、今後数か月をかけて学ぶ使徒の働きから得た教えを実践しましょう。